松戸市　図書館整備計画審議会会議録

平 成 ２ ７ 年 度 第 ４ 回

平成２７年度第４回　図書館整備計画審議会

○平成２７年１１月９日（月曜日）

○出席委員

常世田会長　大串副会長　柳澤委員　森委員　澤谷委員　鈴木委員

○傍聴者　　５名

○市側出席者

<table>
<tr><td colspan="2">教　育　委　員　会</td></tr>
<tr><td colspan="2">伊藤教育長</td></tr>
<tr><td>＜教育企画課＞

宮間課長
小泉主任主事</td><td>＜社会教育課＞

嶋野課長
町山専門監
白鳥主査
齊藤主事</td></tr>
<tr><td>＜図書館＞
中川館長
山田補佐
長谷川主査</td><td>＜生涯学習推進課＞
鈴田課長</td></tr>
</table>

○次第

１　　会長挨拶

２　　議事

（１）提言について

（２）その他

◎開　会

事務局　ただいまより平成27年度第４回図書館整備計画審議会を始めます。

本日の審議会は、松戸市情報公開条例に基づきまして、公開の対象となっております。本審議会を公開としてよろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

事務局　傍聴についてご報告いたします。

本日の図書館整備計画審議会に５名の方から傍聴したい旨の申し出があります。これをお認めしますので、ご了承願います。

それでは、傍聴人に入っていただいてください。

（傍聴人　入室）

事務局　本日の会議は、委員６名が出席しております。松戸市図書館整備計画審議会条例第７条によりまして、委員の過半数が出席しておりますので、会議成立となります。

◎会長挨拶

事務局　それでは、常世田会長よりご挨拶を賜りたいと存じます。お願いします。

会長　お忙しいところお集りいただきまして、ありがとうございます。

先ほどお話を聞いたところでは、この審議会で検討している新しい図書館に向けて中央図書館でレファレンス研修を行うなど、準備を始めていただいているとのことでした。御礼を申し上げたいと存じます。

それから、皆さんもご存じだと思いますけども、ＴＲＣとＣＣＣが袂を分かつということになったという報道がありました。その主たる原因が、分類、それから配架の不備です。まともに本が探せない。あるいは雑誌のバックナンバー、これはとても重要なものですけども、それをないがしろにしているということが理由として上がっておりました。TRC会長自らがそういう発言をされていたわけです。ここについては当初から図書館関係者も指摘していたことでありますので、さもありなんということでありましたが、最終責任を持つべき行政がこの問題を把握し、コントロールできなかったということが最大の問題だと思います。この問題点については当初から指摘されていたということがありますので、そのことについてきちんと対応すべきでありましたし、外部から指摘される前に行政はそれを把握し、コントロールすべき責任があったのではないかと感じました。この松戸では決してそういうことが起

こらないと信じております。

以上であります。

事務局　ありがとうございました。

それでは、これより議事進行につきまして、会長にお願いしたいと存じます。

常世田会長、よろしくお願いいたします。

会長　それでは、議事に入る前に、議事録署名人をお願いしたいと思います。本日は、大串副会長と柳澤委員によろしくお願いいたします。

◎提言について

会長　それでは、議事に入ります。議事の１「提言について」ということで、議論を進めてまいります。これにつきましては、討議していただいた内容、特に整備された中央図書館の機能について、きちんとつめたいと思うわけですけれども、その内容を何らかの形でまとめたいと存じます。今回、若干の資料もご用意いたしましたけれども、それをたたき台にして、今回さらに進めていきたいと思います。

それでは、事務局と私とで準備した資料がございますのでご覧下さい。前回、中央図書館の主たる機能について討議しました。それで、一番上の情報提供及び支援機能というところですけれども、当初これを一つにということだったのですが、２つに分けようと考えているところです。情報というのも、要は図書館学で一般的に使われている情報資源という言葉に当たると思っています。情報資源というのは、今までどおり目に見える本、雑誌という資料と、それからデータベースを含めて目に見えないデジタル系の情報を情報資源と図書館情報学では呼んでおりますので、それを提供する機能です。これは従来型の開架室、本棚があるような空間をまず想像していただきたいと思います。自分で探すスキルがある利用者の方は自分で資料を探す。その方たちのために情報を提供する機能というのが基本的にまずあるわけです。同じ情報提供機能でも、これから新しく出てくるものとしては、データベースですとか、いろいろなデジタル系の情報を図書館に来館した方に提供するという意味では、今お話ししましたように、スキルのある方は情報端末に自分が座って、自力でそこから情報を引き出すわけでありますので、この情報提供機能の中には本棚と同様に、パソコンですとかデータベースの端末ですとか、あるいはサイネージのようなモニターですとか、そういう新しい多様な情報機器が設置されている空間と考えていただけるといいと思います。

本棚が並んでいる今までの図書館にプラスして、デジタル系の情報を自力で手に入れる方たちのために多様な情報提供スペースがある。

もう一つは、支援機能ですが、これは利用者が情報資源を利用する際に図書館側が支援する機能です。どんなにスキルの高い市民でも、全ての本、全てのデータベースを使いこなせるわけではありませんので、迷ったとき、使い方がわからないとき、当然図書館書に支援、助力を求めるわけです。そのための空間的な設えが情報資源提供空間の周りに上手に配置されていないとうまくいかない。図書館の席がとんでもないところにあったら、支援しようがない。情報資源を使うときの側面からの支援をどうマンツーマンとして担保するか、このための空間はどう設計すればいいのか、これは全く新しい問題で、アメリカの図書館もこれについていろいろ新しい試みをやっています。従来型の図書館は、先ほどお話ししましたように、こういうものがばらばらに配置をされてしまっていると思いますが、新しい図書館ではそれがうまく混在されているような空間を目指すべきだと思っております。

後ほどお話ししますが、生涯学習支援機能とか市民活動支援機能のところに、市民同士が支援し合う、サポートし合うというような機能を実現したいという話をしなくてはいけないのですが、図書館側からのサポートと、市民同士のサポートがうまく相乗効果を生むような形で空間的に実現できるような設えがこの一番上の情報資源を提供する空間とそれを支援する空間の中に織り込まれなければならないと思っております。

そういう意味では、一番左側にいろいろな機能がありますけども、空間的なことで言いますと、全部きれいに分かれるわけではなくて、それらを実現するための空間はかなり重複して存在していると考えていただければいいかなと思います。

具体的に矢印の中に今お話しした本棚が並んでいる従来のような空間である一般書庫の開架スペース、それから新聞、雑誌、そこに支援の窓口としてのレファレンス、それから郷土資料が並んでいるところ、それから障害者のための施設、視聴覚のブース、それからインターネットやデータベースの席、児童関係、読み物全般なんというのもここにあると思うんですけれども、ここに上がっているのは従来型の空間の充て方でありますので、先ほどお話ししました新しい空間の設え方、アレンジの仕方については皆さんからいろいろご意見をいただきたいところであります。

それから、機能に戻っていただきたいのですが、２番目のところが、管理運営機能ということで、これは事務室ですとか電算室ですとか、いろいろな資料を整理する、そういうところと考えていただければいいかと思います。

それから、収集保存機能も従来型の書庫と考えていただければと思いますが、ただ今回、かなりの規模になりますので、特に閉架部分については、いわゆる「集密書架」といいますが、電動型の書庫のようなもの、「自動書架」といわれるロボット型にするのか、あるいはより新しい保存機能を想定していくのか、この辺も若干考える必要があると思います。

それから、生涯学習支援機能と市民活動支援機能というのはかなり似通った機能になりますので、それぞれ矢印のところに空間的な表現がなされていますけれども、これはほぼ両方重複すると考えていただければと思います。個人研究室ですとか、ラーニングコモンズですとか、プレゼンテーションのスペースですとか、展示室、視聴覚ホール、従来型の会議室、視聴覚ホールみたいなものに、ここでも何回か議論が出ましたけれども、自由に市民が個人でもグループでも集まって議論して、それぞれのグループ同士での接触が生まれるように、本当の意味での市民の交流空間といったらいいと思いますが、そういうものを想定しているということですし、閉鎖的なグループ学習室、研究室のようなものも、全体の規模が大きくなれば持つことができるのではないかと思います。

個人研究室については、市川の中央図書館には既に、もう20年前ぐらいから存在しておりますので、そんな新しいことではないと思いますが、視聴覚ホールなどについても当然、イスや机が自動的に収納され、あるいは展開されるような仕組みがあれば、体育館のような使い方もできるわけでありまして、そういう設えをイメージしていただけたらと思っております。

それから、ボランティア活動室に関しても、従来型の単に会議室のようなものが多いわけですけど、もう少し活発に市民の方が活動していただけるような空間的な工夫、アレンジというものもあってもいいのではないかと思います。例えば、地下のただの会議室に、ボランティアの活動のためのもろもろのものが、押し入れに突っ込まれていて、あとは椅子と机があるというようなボランティア室が結構あるのですが、そうではなくて、ガラス張りになって外から見えて、ボランティアの人たちが出入りしていて、そこでいろいろ楽しくやっている活動がそれ以外の方でも見えるような、そういうもっと生き生きとしたボランティアのための空間の工夫が必要だと思います。

それから、メディアラボと書いてありますけども、これもアメリカの図書館では既に実施しているところと、これから計画しているところを含めると、70％ぐらいの図書館で今取り組んでいる、メーカーズ・スペース、パブリケーション・スペースといわれるものです。３Ｄプリンターですとか、そういう先端的な機器を置いて市民が多様な活動を行うスペースが

あります。これらのものも含めた空間をイメージしていただきたいと思いますが、ただ現在、日本にはほとんど存在していない機能と空間でありますので、皆さん想像力を発揮していただいて、しかも、さらに考えていただきたいのは、その10年、20年先を考えていただいて、プラスアルファを加味していただきたいということであります。つまり、日本の社会、それからこの松戸の地域がこれから10年、20年、30年後にどういう街になっていくのか、その中で図書館というのはどういう機能を果たしていくのか、そこから逆算していって、こういう機能が必要だから、こういう部屋、こういう建物の設え方が必要かもしれないということを皆さんでぜひ考えていただきたいと思います。

それから、下から２番目の他機関の連携機能というのは、例えば新潟市の中央図書館や君津市立中央図書館にもありますが、小学校、中学校、高校の先生、学生が１クラス分、図書館に来て、そこでいろいろな調査研究活動をやるとか、あるいは地元の企業が行政と一緒に何か企画をする活動の場として図書館を使うとか、ビジネス支援ですとか、医療情報を市民に提供することですとか、法律情報を市民に提供して市民活動を支援していくとか、そういう新しい地域の課題を解決していくようなサービスをやるために、専門機関との連携の機能というものを空間的に、新図書館の中でどのように実現していくかという視点で考えていただければと思っています。

最後に、リフレッシュ機能でありますが、昔は食堂みたいなものが図書館の中でアンパンや牛乳を売ったりということがあったわけですが、最近は世田谷美術館に代表されるように公共施設にもすばらしいレストランが設置されるようになりました。そのレストランだけに行くようなレベルの高いものが公共施設にもできるようになってきました。武雄図書館でスターバックスが注目を集めたわけで、ブックカフェ型の図書館がイメージされるような風潮さえ生まれてきました。その是非はともかくとして、長時間図書館に滞在し、調査研究をするニーズもこれからは増加すると思われます。したがって、気分転換をしたりする機能はどうしても必要であります。

新しい飛行場に行ったり、新しいショッピングモールに行けば、もう皆さんもご存じのように、リフレッシュのための空間の質というものが大分高くなってきているわけでありまして、当然、規模の大きい図書館には質の高いリフレッシュの空間、あるいは建物全体がそういう機能を持っていることも必要であると思います。私は本を読まないし、レファレンスも行かないし、３Ｄプリンターも使わないけど、しかしあの図書館の空間に身をおいていたいという利用の仕方も含めて、市民の方に集っていただけるような機能が重要であろうと思い

ますので、これについてもぜひご審議いただきたいと思います。

図書館ということだけで議論するというとなかなか難しいので、皆さんがご存じの一般的な公共施設なり公共空間なり、あるいは私的空間でももちろん構いませんし、こういういいところがあったという、例でも構いませんので、少し想像力を膨らませてください。

柳澤委員　もう少し補足する意味で申し上げます。我々がよく与件と言っているものですけど、この与件をもとに設計を進めていくわけです。通常ですと、一般書庫か開架スペースが500平米とか、事務室60平米とか、具体的にここにその延べ床数が出てきて全体がつくられている。前回ここで少し紹介させていただいたように、大体平均すると、人口40万人以上の都市ですと、五、六千平米がトータルでなってきます。図書館の中で特徴的なのは、実は閉じている部屋というのは図書館の中にはそうないのです。

ここで言うと、例えば対面朗読室、これは小さな部屋で、本当に耳が例えば弱いとか、そういうことも含めて、落ちついた部屋で読む場合必要なところを完全に閉じていないといけない。あと、図書室の室とついているものと、スペースとついているものと、コーナーとついているもの、これはわかりづらいですよね。実際にはコーナーとついているものは、スペースと変わりはない。室と呼んでいるものは、確実に閉じた機能を機能的に必要としているということなので、管理運営機能というのに室が多いのは当たり前なんですが、そこに他人が入ってきては困る、一般の人たちが入ってくる部屋ではないという意味もあって、そこに制御が必要になってくるのですね。それ以外の上は、１番はほぼオープンな空間ということになるので、その閉じた部屋とオープンな空間のバランスをどうするのかということが、実際の設計としてはスタートということになりまして、今、常世田会長が言われた１番と５番までいった中で、実はスペースとして書かれていないのが、貸出カウンターとか返却カウンター、これが意外とスペースをとります。大勢の人間が本を囲んできて、また貸すので、これは児童のほうも一般の方のほうも、ここにはないけれども、これは貸出カウンターとなっていますよね、貸出・返却カウンタースペースというものが必要になってくる。

もう一つは、今、インターネット閲覧席と書かれていますが、ほぼ最近の図書館はインターネットと借りてきた本を同時に見られるように使うキャレルと呼ばれている、これも閲覧の一つですが、インターネットも本を読むのも両方できるような意味でキャレルという言い方を今なってきていますが、そのスペースが必要になってきます。だから、キャレルコーナーと言ったり、キャレルスペースみたいな言い方です。一般の閲覧スペースという言い方が正しいのかもしれないのですが、当然児童の閲覧スペースというのも入ってきます。だから、

そういうほとんどがスペースでできている中に、この管理機能が閉じて、全体を制御するという意味でこの２番があるというようなイメージをつかんでいただきたい。

もう一つは、閉架と開架書架です。開架はイメージできますよね、背が低い子どものところであれば、高さが1.2メートルとか1.5メートル、大人が立って目線が通るような書架が多いと思いますけど、一般のほうにいくと２メートルぐらいだったりとか、高いところでは2.4メートルとか、当たり前ですけど、最上段に手が届くということが一つの条件になって、最近大学とかではからの書架を置いたり、中国の図書館とかも、コピーした本をずっと入れているとか、そういう不思議な図書館もありまして、本がとにかく多いということを見せるためにそうなっている図書館もあるぐらいなんですが、そういう開架は開架で、もう一つは閉架はやはり閉じている。そこも一般の人たちが基本的にはカウンターに近寄れないので、閉鎖的。ただ、この閉架図書もガラス張りで包まれた閉架図書館もありますし、完全に部屋の中に閉じ込めるということでもないです。

最近、岐阜にできた「ぎふメディアコスモス」という岐阜の市立図書館ですが、これも閉架図書がガラス張りでできていて、この館がどのぐらいの本を持っているということが一目でわかるようになっている工夫もされています。ですから、開くということと、閉じた部屋ということと、簡単に言えばそういうものの組み合わせでほぼできている。

その下のグループ学習室やこのプレゼンテーションスペースなどについても、ガラス張りで開かれた部屋のつくり方をしている建物もあれば、このようにある意味すごく閉鎖的につくっている場所もあります。その辺も、要するにどういう機能で、どういう空間をこれからの松戸市がつくっていくかということに、その計画として大きく関係するのかということです。

数が決まれば、会議をいっぱいやりましょうといったら、会議室30個みたいな計画になるわけです。50平米の会議室を30個つくって、それで1,500平米みたいな会議中心となった場合、当然会議室がいっぱい増えると思うのですが、大きくはここでいうと、その市民活動支援とか生涯学習活動支援と、１、２、３番までの支援は、フロアで分かれたとしても成立するような、そういう機能的な分化があってもいいと思います。当然、今回は面積も大きくなるので、ワンフロアでということはできないと思うので、機能的なその階層の分かれ方みたいなものもこれから議論していかなければいけないと思います。

会長　中高校生が来て、楽器をがんがん鳴らして活動したいというときに、その音はどうするのという話が出るわけで、音をどうするかという建築的なノウハウは建築家の皆さんが持っ

ているので、まず若い人たちが図書館に来て、自由に大騒ぎしてもいいよという機能を持たせるかどうか、そういう議論の進め方がいいと思います。

森委員　私の仕事の関係なんですけど、先ほど人権相談で、障害者の方のお話を伺ったのです。今、私が言いたいのは、図書館というのは、前回もお話ししたとおり、多様性も必要なんだ、ある意味インクルーシブな空間でなければいけないんだということがありまして、それをちょっと念頭にして話させていただきたいのですが、たまたま聴覚過敏とそれから視覚過敏の障害を持った方だったんですけど、知的にはとても高くて、一流の上場企業にもお勤めしているが精神的に病んで、今は自宅にいる。彼の相談というのは、まだここで引きこもりたくない。まだ社会的に勤めたいし、そのために行ける空間というよりも、自分が家だけではなくて、外に出たい空間が欲しいと言っておられるのです。唯一お城めぐりが趣味なので、お城を見ると怖くはないけれども、あと一歩外に出ると、視覚過敏であるとか聴覚過敏のため他人の視線に攻撃されているように感じる。それで図書館はどうですかと聞いたときに、自分は、彼はいろいろ勉強もしてきたし、図書館は大好きだが行けないと思うと答えました。どうしてと聞いたら、司書さんがいるからと言うのですよ。それはなぜかというと、司書がどうのこうのというのではなくて、その司書の視線が怖い、人の目が怖いと言うのですね。一般に、割とこういう方たちというのは決して少なくなくて、その方たちの一番大きな特徴というのは音に敏感であること、それから目に敏感であることなのです。

発達障害の方たちも何でこんなに体を動かしてしまうかというと、人の瞳が怖くて体が動いてしまうとか、だから結構少ないことではないのです。他人が怖いから図書館には行けない、でも行きたい。気持ちがありながら、障害のため行かれない方もいらっしゃるけれども、そういう方たちが体調がよくなるまで待ってもらうとか、それでもできるだけ望む以上は受け入れてやるのがというのも、その人を考える上で一つの案なのかなと思いました。例えばインターネット等を駆使したりして何とか入館しやすくなるような手立てを設けるべきでないかと思った次第です。

もちろん、予算のことも、それからスペースをどれだけとれるかということもあるのですけれども、できるだけ求める方は受け入れるような気持ちでいいと発言してみました。

会長　この間もお話ししましたように、障害者差別解消法が来年の４月から正式に施行されるわけでありまして、合理的な理由がない限りは、どんな障害を持った方でも社会全体で健常者と同じように対応しなければならないという踏み込んだ法律であります。大学図書館、公共図書館でも今それに向けて準備をしております。例えば大学でも入試が随分変わるだろう

と思いますけども、そういう意味では公共図書館は一歩先んじて障害者サービスと取り組んできましたけども、それでもほとんどは視覚障害、目の不自由な方に対するサービスがやっとだったということなのです。

それが今お話しいただいたような、ディスレクシアもあれば、内部障害もあれば、さまざまな障害があるということで、そういう方たちに対して図書館は対応していかなければならないということが目前に迫っています。弱視の方とか聴覚障害の方は音や色や機械をなるべく強くしたものが対応しやすいわけですけども、視覚過敏の方からするとそれはとても逆効果になってしまうということなので、単なるユニバーサルデザインだけではなく、相矛盾するような要求にどう空間を整えていくかというのはなかなか難しい。何せこれから公共施設が直面する問題だと思いますので、非常にいいお話をしていただいたと思います。

澤谷委員　先ほどお話がいただいたように、若い方が集える場所、そういう図書館があるというのはすごく必要性を感じます。例えば先ほどおっしゃったような音楽を楽しむ、そんな空間があったらすてきだと思います。でも、どこからどこまでをよしとするのかそれが必要ではないか、何でもありというのはまずいかなと思いました。

それは、例えば若い高校生ぐらいの方たちの様子を見ていると、すごく軽音楽が大好きだし、そういうところを練習したりする場所をとても必要となさっている人たちを知っています。そういう場所を提供したとすると、それが図書館のありようとして、果たしてそれが適しているかどうかというところが、やはりどこかにけじめというものが必要な気がします。オープンではあるけれども、やはり約束事もある、そういう空間というのも必要かなという気もします。特に若い人たちを呼び込むとしたら、そのあたりをどういう形のものをよしとするか、そこはやはり考えなければいけないという気もします。

会長　できれば強制的に何か押しつけるのではなくて、若い人たちが自然にこうしなくてはいけないと自分たちで感じていく、考えざるを得ないような空間の設えができるといいですよね。若い人たちに対応する場合も、人的な支援、人的な接触、働きかけというのは当然そこで想定しなくてはいけないとは思うのですが、それも含めて、何か強制的ではなくて、かなり自発的に感じていけるようなすばらしい空間になればいいなと思います。

柳澤委員　今、さらにおっしゃられたように、この問題というのは結構技術的には解決できるものが多くて、透明で中が見えるけども、ガラスを二重にして、中で音楽を演奏している人とか、外からでは全く聞こえなくてとかいうようなホールのつくり方は技術的に可能になっています。

ロンドンに、2007年につくられた図書館で「アイデア・ストア」というタイトルのものがあります。すごくいいタイトルだと思うのですけど、図書館ライブラリーってつけるのではなくて、アイデアのストア、要するにアイデアのショッピングスペースみたいな意味でつけた、ホワイトチャンネルという、貧困層の方がすごく多く住んでいる地域があって、そこにデイビット・アジャイという建築家が2007年にそこのまちに図書館をつくったのです。その図書館は１階がホールになっていて、音楽の演奏ができるようになっています。それは地域の貧困の人たちに少しでも音楽に触れる機会を増やそうとしたわけです。それまでその地域はロンドンの中で最も読書率が低かった地域だったのですが、とにかくそのアジャイの考え方は、本に触れる機会をたくさんつくろうということで、図書館に来てもらうために、１階にホールをつくって、定期的に演奏会をやる。そうすると、お金がないので、逆に言うと、本があればそこの図書館にやってくるということで、その図書館で800種類のサークルをつくったそうです。それはロンドンの中で最も多くのサークルを持った図書館になって、今までの４倍の人が入るようになって、最下位どころか、上位にこの扱いが来るという事例をつくったのです。それも、音楽室を地域が欲しいと言ったということもあるのですけど、それは行政が中心になって、人を呼ぶためにはどんなプログラムと予見が必要だろうかというもとに生まれた問題だと思うのです。一般的には、大体200人ぐらいから300人ぐらいの規模の多目的ホールが最もハンドリングがよくて、使いやすいと図書館では言われています。

ただ、松戸市が図書館を中心にして、例えば常世田会長を呼んでレクチャーをやりますとなったときに、100人しか入れないとなると、満員でクレームが出る可能性がある。そのときに、何人の多目的ホールが要るのかみたいなこともこれから決めていかなくてはけないのですけど、この中には多目的ホールというのは特にないのです。視聴覚ホールもだめなんですけども。

そういう意味では、そういう場所を若い子たちに貸すという方法もあるだろうし、実際に音楽練習室みたいなものを図書館に組み込む例があるし、海外でもありますし、日本でもあるんですけど、本当に要るのかという問題です。若者はあれば間違いなく来るのです。あの図書館に行ったら、音楽の練習できるよ、ということで。ただ、それが本当に今回要るのかということをここでも議論しなくてはいけないし、むしろ広くそういう若者世代までも集まるような多様な場所の提供を図書館がしていくのだという骨子があれば、もちろんそういう場所が必要となるでしょう。

だから、言われたように、今の図書館は何でもありなのです。何でもありの中で、その何

でもありなものをどう配列していくかという話が、ここからしていかなくてはいけない。排除するのは簡単ですが、そうすると、どんどん従来の図書館に近くなっていく。図書館は本を貸すところ、返すところだけになっていってしまうので、逆にいかに包含するかという考え方というのは、これからの図書館には結構大事なのかと思います。

森委員　以前、事務局からお借りした本ですけれども、「知の森」、「知の広場」としてヨーロッパの図書館について書いていた本ですけれども、その挿絵の中に、ウィーンのレオポルドプラッツというところがありました。そこに、今柳澤委員がおっしゃったような、「みんなの集い、広場のような図書館」という挿絵が載っていまして、この夏に行ってきました。３年前にも知り合いがそこで写真を展示しているということで行き、今回そこに行くのは２回目だったのですが、２度目で大きく変わっていたことがありました。３年前は売り場であったいわゆるミュージアムショップがなくなっていて、若者のための貸し出し、いわゆる多目的スペースが全部変わっていたのです。聞いてみましたら、ウィーンというのは観光都市なので、あちこちの美術館にミュージアムショップがあって、そこでも観光客があふれている。だから、そこで買ってもらえばいい。レオポルドプラッツは図書館であり、ミュージアムクオーターというところで、様々な図書館や美術館が集まっているところですが、そこに置くのはまだメジャーではないが将来性のある若いアーティストにして闇雲にスペースはとらない。それよりも、若い人たちが活動するスペースをつくろうということで、今まではミュージアムショップが何でもありだったのですね。ココシュカやクリムトであったり、いわゆるウィーン中の作家の作品をお土産物屋のようにして置いていたのですけれども、完全に若い作家の作品にして、図書館みたいなスペースと、あとは貸出機能にして、だからそういう切りかえというのもあるのだなと感じました。

会長　これまでも柳澤委員を初めとして、塩尻の話が出てきたと思うのですけども、そこはいわゆる共有スペースが非常に広いので、実際に中学生や高校生がグループで来て、借りた本を使って議論をやっている脇で、壮年・高齢者のグループがいろんな相談をしていて、お互いがそれぞれ何をしているかが、それとなく相互にわかるということが、非常に自然に実現できているんですね。多様な市民の交流とか、年齢を越えた交流スペースなどという、うたい文句でできる施設はたくさんあるのですが、なかなか実際には実現できていない。塩尻は本当にうまくいっているほうだと思います。

そこでいろいろな経験値や、知識、情報の交換ができるわけです。そういうものを保障するような空間をどうやってつくればいいのか。従来の生涯学習施設とか公民館の最大の問題

は、全部部屋に分かれてしまっていて、結局利用者はその部屋の中で何かやって、終わるとさっさと帰ってしまう。どこにも交流するための設えがない。もちろん全部強制的に必ず交流しなさいというのも変な話でありますので、個別でしたいときには個別でできる、その選択の幅を空間的に用意する必要があると思います。

澤谷委員　ある広い空間があって、そこに様々な方が集まって、そこで交流が芽生えていくというのは私たちがいつも話してきた中でのとても望ましい形だと思います。ある程度そこに近い形として塩尻の図書館があるという話も伺って、そういう形になるといいなと思っているところです。ただ、それらの交流が芽生えるきっかけが空間によるものなのか、あるいは空間だけではなくて、何かしらの例えばＰＲとか、社会に対する投げかけ方とか、大きな空間のみでない何か要因というのがもしあるのだとしたら、それも学んでいかなければいけないところかなと思います。もしあったら教えてください。

大串副会長　多目的ホールみたいなオープンスペースの用意の仕方、例えば塩尻の例が出ましたが、この前、週刊ダイヤモンドの読書の特集で伊万里市民図書館が紹介されていました。伊万里市民図書館は最初から住民の方が７年ぐらい運動されてつくった図書館です。住民の方が積極的に欲しいということで、オープンスペースを用意して、住民の方のボランティア活動でも使われています。伊万里の場合は雑誌の記事にも書いてあったのですけども、４万人ぐらいの市民のうちの７割の方が１年のうちに１度は図書館に来られて、ボランティアの方は550人登録しており、非常にたくさんの方が図書館で何かをやっているということが20年も続いているのです。市民が図書館の開館を毎年お祝いする、そういうことで有名なところですけども、そこはむしろ住民の方々が図書館をつくる過程でいろんな形で参加されてきて、それでこういうのをやってきているということです。特に住民が求めたわけではないのですが、つくっているところもあります。例えば、長崎市立図書館などがそうだと思います。多目的ホールを最初から作っていました。

それから、私が以前関わった山梨の図書館も、多目的ホールを無理つくりました。最初は交流空間が必要だということはあったのですが、実際にはその図書館側には活用方法などあまり考え方は示されませんでした。それでつくってみて、ではどうするかということで、長崎の場合はつくってみて、やっていくうちにだんだんだんだん市民の連携の場ということになっていった。長崎は原爆が投下されたところで、がんの発症率が非常に高く、がんに対する取り組みというのを、市でも県でもすすめてきた経緯がある。図書館は指定管理ですけども、指定管理の職員に、地元の方でそういった関係の人たちで図書館でも、がんに取り組む

情報提供だとかいろいろやりたいというので始めて、それをきっかけに市民の団体や行政と連携ができて、図書館と一緒に何かをつくると人がたくさん集まるということになったそうです。

それから、図書館にいろんなリーフレットを置くと、よくさばける。確かに50数カ所、サービスのポイントがあって、１日5,000人ぐらい来ますので、そういったことと、それで図書館で何かをやるとすごく人が集まる。今まで病院でやっていたがんの啓蒙活動も、図書館でやると人がたくさん集まる。そういうのがだんだん口コミで広がっていくと、ほかの経済団体だとかいろんなところも図書館と一緒にやりたいと言い始めて、外からいろいろな企画が持ち込まれて、多目的ホールの活用というのがだんだん広がっていったというケースです。

だから、どういうタイミングで、どうそういうものを設定して、考えてつくってということなのです。だから、ある図書館みたいに全然何も考えなかったけども、つくってみて、それから考え始めたみたいなところもあるし、最初から市民の方々がそういうのが絶対必要だということで、こういうふうに使いたいということで考えたところもあるし、その辺が非常に難しい。

だから、私どもがここで考えなくてはいけないことは、図書館としてはそういうのは今後も、常世田会長が言われたように、10年、20年後を考えたら、必要だ、だからこういう多目的室なら多目的室を設けるということになるのかなと思います。

それから、地区懇談会を開いて、意見を出していただいて、こういうふうに使いたいと。先ほど常世田会長が言われた、公民館で活動していたけども、公民館をやめて図書館で活動するというところも出てきているわけです。八王子がそうなのですが、今まで公民館でいろいろやっていた方が図書館に移行してきている。それで、図書館で調べ学習やる、図書館の資料を使って調べるような活動をされて、それでそれがまた図書館の中に定着している。それは公民館の方より利用については、図書館のほうが自由でいいということもあったようです。図書館を使って調べる活動が評価されている図書館には、座間市立と八王子市立というのがあります。その辺を私どもの審議会がどう考えて提案するか、それからあと住民の方々はどう考えているのか、活動されたいか、その２つがあると思います。

会長　今、皆さんの討議を聞いていて感じるのは、ランガナタンという図書館界では有名なインドの方なのですが、その方の「図書館は成長する有機体だ」という有名な言葉があって、司書でその言葉を知らなかったらもぐりなのですが、図書館は必ず成長するのですが、その成長の仕方に予想がつかない部分があるのです。20年前にラーニングコモンズやインターネ

ットが、図書館で活用されることになるという予想がつかなかったように、我々も限界を持っている。

昔から図書館建築はフレキシブルでなければいけないと言われていて、本棚は動かせるようにし、空間の設計を変えられるようにすべきだという議論がずっとあります。だけど、そういうことができるように設計し、本棚も置いたけども、レイアウトを変える図書館はほとんどありません。それを本気で将来にわたって平面形を変えていく、仕切りを変えるというようなことを本当に前提とした空間を考える必要もあるのかもしれません。

そうすると、もしかすると電子書籍が増えていって、紙の本が減らせれば本棚を減らして、そこをほかの空間として使えるわけです。実際に、アメリカの医学大学図書館では、ワンフロア全部の書架が不要となった例もあります。そういうことも含めて自由に空間を使っていけるようなことを前提とする必要もあるかもしれません。

それから、人が集まってくるのはなぜでしょうか。一般的な公民館の場合は、部屋しかないので、部屋を目的に集まってくる。図書館が決定的に違うのは情報があるということです。大量の情報がそこにある。活動する空間と活動に必要な情報がワンセットで用意されている空間、施設というのはほかにないのです。私はそれプラス、人的支援だと思います。そこに専門性の高い親切な図書館員がいて、例えばインターネットの使い方として、どのようなキーワードを選ぶといいというところまで指導してくれる。図書館だったら、情報資源支援機能ということで、そういうことまで図書館員は教えられるわけです。その辺が徹底的に違うと思います。情報があることと、それを使ってどうやって自己実現していくかということ、かなり細かいことまで支援してくれるという人間がいるということです。

浦安にいた当時ある利用者が、図書館というのは何が違うかというと、ほかの施設と決定的な違いは図書館員の優しさだと言ってくれた方がいます。僕らは意識していないですけど、そういうホスピタリティが空間にあるということが必要であって、完璧な空間ができたからといって、そこに情報がなくて人的資源もなかったら人は集まらないということなのではないかと思うのです。だから、ハードとソフトの組み合わせ、そこで市民を支援する専門職も働きやすいような空間という考え方も必要だと思います。

具体的な名前を挙げると大変失礼になるのですけど、高名な建築家の方がつくった図書館で、利用者はそこそこ使いやすいのだけど、図書館員には疲れてしまうという図書館があったりするわけです。そうであったらまずいかなと思うのです。

柳澤委員　先ほど澤谷委員が交流するというポイントで、空間と建築のあり方みたいな問題だ

けでは、今、常世田会長が言ったように全く交流なんか起きないわけですよね。人的保障という問題も大きいですけど、図書館には目的を持っていく場所と、少し目的があって行く場所と、余り目的を持たないで行くという、いろんな方がいらっしゃると思うのです。今までの図書館は、はっきりとした目的を持って来られる方が多かった。勉強しに行くとか、本を返しに行くとか借りに行くとか。ただ、その中間の人もいて、全く興味がないという人もいる。

これからの図書館というのは、この全く興味がなかった人や中間にいた人たちがいかに図書館を活用していくかという図書館の利用のされ方がはやってきているのです。そうなったときに、目的を持った人というのは目的があるので明確ですよね。図書館に来る目的があって、今日は何々の講座を受けよう、あそこの部屋に行って目的達成したら満足と言って帰る。達成感があるわけですよね。ところが、ぶらっと来た人、今日は本を借りようかな、借りないかなという人たちは、何となく達成するかしないかはまさに人的サポートがあって、何かすごいいいことがあったねというときに、達成感がある。

そういうことが部屋の中だけに交流を求めるということは難しくて、オープンスペースで、例えば今日は展覧会を全体でやっていますよというときに、図書館に本を借りに行った人が触れ合う。それというのはプログラムなので、館の運営の仕方そのものですよね。空間が大事だけれども、館の運営がその空間をどうやって生かすかということが対になっていないと、全くそういうものが生まれない。

だから、よくソフトとハードの融合って簡単に口で言いますけども、これを達成するというのは本当にたやすくないのですが、大体どこの図書館へ行っても、その図書館構想にはソフトとハードの融合って書いてあるのです。どこが融合しているのだろうと色々思うところがあるんですけど、それをどう融合させるかということがここで話していかなければいけない一つのテーマでもあるし、それは例えばこれから設計をしていくというときにも、ずっとここで投げかけた構想の骨子が生かされていかないといけないわけですよね。

澤谷委員　今の柳澤委員のお話を聞いていて、私は小学校の図書館の子どもたちの様子を思い出しました。今学期になってから、誰かに言われた話だったのですけれども、今、小学校は朝読書とか読書活動をどんどん進めています。朝読書をやっていればいいのかというと、違うだろうというような話が出てきまして、読書というのは本を読むところで終わってはいけないのだ。その本を読んだ中で得た知識をどう実際の生活に生かすか、子どもたちが例えば昆虫の図鑑を見たらば、その昆虫の図鑑で終わってしまうのではなくて、実際に虫を見たと

きに、はっとするような、そういうような活動につながっていくといいなという話をしたのです。

今お話を聞いていて思ったのは、本を借りに行った、本を読みに行った。でも、そこで何かしらのソフトの部分でしょうか、今おっしゃった、知的な欲求というか、そこを刺激されるようなプログラムというものを図書館が提示するというか、目に見えるところに用意するような、そういうものもすごく今後大事なものだと思いました。

会長　まさに読書は目的ではないんですよね、手段ですよね。読書をすることによって何かをしたくなる。何かをしたい人が本からの情報で実現するための具体的な方向性や方策を手に入れる。

副会長が他機関との連携機能が重要だとおっしゃったのですが、学校の先生との連携をして、その先生にクラスの子どもを連れてきてもらって図書館で何かやるとか、病院や商工会議所だとかいろんなところと連携して、サービスをやる、講演会をやるという、そういう目に見えないネットワークが図書館の外にアメーバが手を伸ばすように広がっているからこそ、その関係の人脈や何かの人たちが図書館にまた集うようになるわけですよね。だから、たまたま来た人が図書館に、いいなと言って、そこでいろいろ活動するということも当然なのですが、図書館が積極的に外部に関係をつくっていくことによって、その関係者が図書館にまた集まってくるということですよね。そういうことも含めてマンツーマンというか、人的な活動というものがあって、建物の中が活発になっていくということなのではないかなと思います。

森委員　ある程度、地域、今後のまちづくりの核になるのが図書館ではないかと思うのです。私は、この11月に田舎に帰りまして、秋田の公民館の文化祭を手伝ってきました。そしたら、すごくよくできていまして、小さなまちですけれども、公民館の会報の中に市報も折り込んでいて、それから市の議会だより、小学校だより、中学校だより、老人会だより、町会だよりまで折り込んでいて、大勢の人がそこに集まるのです。何で集まるかというと、そこに行けば誰かに会えるからです。去年、おいしいお茶を飲めたので来たりとか、あそこのうちの孫が大きくなったかしらという感じで集まってきて、それはすごいなと思ったのです。

それは、ある意味小さなまちだという地域性もあるし、公民館の方たちが全て手で折り込んでいるという努力の結果でもあったと思ったのですが、その中であちらの公民館の方と話しているうちに、図書館がないという話題になりました。秋田県男鹿市という「なまはげ」がいるところですけど、本はある。例えば小学校にあったり、支所に本棚が１つあって、そ

の２段ぐらい埋まっているとか、そういう感じではあるのだけれども、何かを調べようと思ったら、宿題くらいなら小中学校へ行きますけれども、結局、病気のことであるとか、いわゆる生活支援、自分がそこに住んでいる住民が何か課題を感じたときに、全く解決する手段がないのです。どんなに地域社会が緊密に結びついていても、住民はいつまでも元気なわけでもなく、いつまでも何も問題がないわけでもなく、住民が何かを知りたいと思ったとき、そういうときはやはり一つ核になる、ここに行ったら何でもできる、何でも知ることができる、情報を提供できる、生活を支援できるという一つの核が必要なのかなと思いました。

ですから、多分、先ほど常世田先生がおっしゃった病院であるとか、商工会議所であるとか、そういうところから本当にどんどん仲間と広めていって、広げていった方たちが何か求めたときに、とにかくここに行けば何が提供できるという、そういう強さを持った図書館であってほしいなと思います。

会長　その目に見える建物と、目に見えない人的なネットワークというものが一緒になって建物の中での活動も盛んになっていくということだと思うのです。そういう意味では、今の分館機能をどうするかというのはどうしても出てくるだろうと思います。病院や学校やいろいろな専門機関だけではなくて、地域の分館というものがあって、その分館をふだん使っている人が分館を通じて、今皆さんが議論しているような中央館の機能も享受できる。その分館の周りにある学校などは、直接中央館とつながるのは大変ですから、まず分館とつながって、それをてこにして中央館にもつながっていくという、そういう有機的なつながりを前提にして、最終的に中央館の中でのにぎわいになっていくという、そういうイメージなのかなと思います。

大串副会長　よくこういう機能に関しては、教科書風に言うと、図書館というのは、資料という要素として20％、人という側面が教科書では70％くらいと言われています。それでは、人というのはどこにあらわれるのだろうと、僕はよく思います。

それで、日本の図書館のこういうお話をお聞きしますと、確かに年間にいろいろとあるのですが、一番重要な図書館員はどこに、どういうふうに機能として組み込まれるのか、人的な機能というのはどこにあるのか。

例えば僕が仕事をしていたところでは、僕の係には年間10万件相談が寄せられていました。世界から、アフリカあたりからも電話がかかってきたりなんかしていたのですけども、そういういろんなところからいろんな話がどんどん来て、カウンターでもほとんど人がいつもいないではないかと、文句言われたのですが、それはカウンターに列をなす人があるので、処

理をするために走り回っていた。サービスポイントが４カ所あったのです。それで、４人が関わり合って、10万件処理をするということになっていました。ニューヨークの市立図書館を見ると、当時10人で30万件処理していたそうです。１件当たり７分ぐらいで処理していたようです。電話の場合は５分以上かけてはいけないというのがマニュアルで決まっていた。それで、僕の図書館の場合はその３倍ぐらいかけてもいいというので、20分までやっていいと言われましたが、そういったところで仕事をしていたわけです。そうすると、こういう機能を拝見すると、人はどこにいるのだろうと、それで人の機能というのはこの中に入らないのかといつも思うのです。

例えば住民の方々からどんどんいろんな質問が来て、図書館の資料だとか情報だとかインターネットなんか使ってお答えをして、情報提供する。論文の書き方から、今こういう論文を書いているのだけど見てくれないかとか、そういったところまでいろいろあって、そういう人の問題がこういったところの議論に入って、常世田会長が先ほど最後のところで言われていましたけども、図書館員という人の問題を、人的な機能というのをこういった議論にきちんと入れて、人を養成するということが大切なのです。

それで、例えば僕らが仕事をしていたところで、ほかの図書館から研修で来た。例えば鹿児島立図書館から１週間研修に来ました、それでレファレンスを一緒にやるのですけども、そこで鹿児島から来た図書館の方が目を回しているわけです。僕らは、要するに１つの質問は３分以内にやれとか言われて、それで１つの質問に20分以上やってはいけないとか言われて、走り回っている。そうすると、他から来られた方は、こういう質問だったら、私は２時間かかるけど、ここの方はそれを７分ぐらいで処理していると言われた。それは、ジョブトレーニングもあるし、人の育成という結果でもあるのです。人の育成をしていくと、今まで答えられなかった人がどんどん答えられるようになる。そうすると、ますます住民の方が図書館に来られる数が多くなって、それで電話がかけてこられる方も多くなって、それで図書館というのは、頼りになるではないかと質問もどんどん出てくるのです。

だから、こういう基盤的な機能があるのだけど、そういった中に人を置く機能をきちんと書き込んでおかないと、人をどう運営していくか、動かしていくか。それから、例えば児童をどうするかとか、レファレンスどうするかということで、そういったサービスを、最初は例えば１人当たり人件費が700万かかると思うけれども、ニューヨークの市立図書館は1つの質問に答えるのに割り返すと160円くらいになると思うのです、30万件ですから。

人がいることによって、人を育てることによってサービスがぐっと広がっていくし、サー

ビスの効率も図れるし、だからそういう整備にかかわる機能のほかに、人の育成とか、人ということを少し書き込んでいただいて、人を育てるということを今からでもぜひしていただくということですね。人を育てるにはお金がかかるのですよ。それなりに予算もとって、勉強する。

だから、鹿児島とかいろんな図書館から私どものところに来ましたけれども、みんな目を回して帰っていきました。こんなことをやっているのかと言ってお帰りになられて、そういう方々はそういった経験をその図書館でいいお仕事をされるということでお帰りになられたと思うのですけども、人の機能をいかにどこに入れていただいて、そういう職員が持ついろんな機能を最大限住民の方に活用していただく、提供していただく。それができるということです。せっかくつくった図書館も活用されないというところも中にはありますけども、そうではなくて、住民の方々に十分投資に見合った還元をしていく。そういったことで、ぜひ人というのを少し考えていただきたいと思います。

鈴木委員　本当に今の大串先生のお話は、当市にとって一番大事な部分かなという気がしました。建物はこんなのがあったらすてきだなといろいろ広がりますが、それを広げていく、すごく無駄なく使っていくときのアイデアを持ったり、そこにはやはりそこで働く人の力というのはとても大きいと思います。

先ほどおっしゃったレファレンスに関してだけでも、それができる人材というのが、一体松戸市でどういう状況なのかなというのは、私どもはわかりません。また、それを育てていくときにどういう講師の先生を呼ぶとか、それから日本の中で望ましいそういう技能というか、そういうことを教えられる方がどれほどいらっしゃるのかとか、たくさんそのあたりの情報というのも集めていかねばならないのではないかなと思います。

それと、もう一つは、そうなると図書館が図書館だけではなくて、ほかの社会教育の部分とつながる、それをつなげられるような力というか、そういうつながりも持っていかなくてはならないのではないか。先ほどの公民館もそうですし、博物館もそうですし、そういう部分と図書館の人材とがどういう形でつながっていくのか。必ずつながっていく、具体的につながっていく部分というものをつくっていかなくてはならないのではないかと思いました。

会長　非常に本質的な議論を今日はしていただいていると思います。それで、共通した本質的な議論ですが、松戸市にもいろんな地域的な特徴がありますので、そういうものに関連した視点で少し議論をお願いできればと思います。例えば、塩尻は人口６万人です。けれど、松戸は50万人近い。当然、図書館も異なる部分があると思います。それから、サラリーマンが

多い、住宅が多い、都心に近いというようなこともあろうかと思いますけど、あるいは分館がさっきも言いましたように、たくさんあるという利点もあると思いますけど、そのあたりで意見や、ご議論をいただければと思いますがいかがですか。

大串副会長　今の話からすると、これから中央館をつくるにしても、やはり分館ですね。そういったところでも、積極的に住民からのいろんな質問だとか、問い合わせだとかそういったものにも答えるか、答えないのかという、そういったことは別において、積極的にそれを受けとめて、例えばそこで答えられなかったら、すぐ中央館に回送する、中央館でできるだけ回答する。それで、答えられなかったら県立図書館とか国会図書館に聞くと、そういうところもありますから、一つは今のそういった分館の機能というものをもう一度見直していただいて、それで中央館と分館が、今も資料なんかでもいただいたと思うのですが、そういう住民からのさまざまな問い合わせ、質問、その他もろもろのことも一体的に運営できるような仕組みにしていただいて、分館の方々にも、僕もやったのですけど、例えば10聞かれたら、ここの資料だったら３は答えられる。だけど、あとの７はしようがないから中央館に聞く。それで、聞き方もファクスで聞いたり、電話で聞く。利用者さんの急ぐ具合によっては、電話で聞いたり、利用者の方に来ていただいて、その場にいていただいて、利用者に聞きながら電話を中央館にして、中央館でその場で迅速に処理ができるようなシステムをつくる。

とにかく利用者の住民の方々がどの図書館に聞いてみようという気になっていただけるような仕組み、それで分館はそんなことを答えません、しませんということは一切言わないということです。そういったところで住民の方々とコミュニケーションするのです。それが単に質問ということだけでなくて、図書館のコレクション、資料のあり方とか、もっとこういった要望だとか、そういうのがどんどんつながっていければ、いつもカウンターに住民の方が立っているような、そういった図書館に僕はしていただきたいなと思います。図書館へ行けば住民の方といつも語り合っている、対面していろいろと話をしているような、そういった何でもとにかく図書館に聞いてみようという仕組みづくり。それはもう些細なことでいいと思うのです。

僕もある図書館で話を聞いたんですけども、全然開館してから誰も図書館に来ない、図書館のレファレンスのカウンターが入り口のすぐそばにあって、建物的はいいんだけども、全然来ない。あるとき、そこにご老人の方が来て、歌を歌った。その歌の歌詞を知りたいと聞いたのです。そしたら、たまたま図書館員がそれを知っていて、歌詞集を持ってきて、お見せしたら、とてもそのご老人の方が喜ばれてお帰りになった。そしたら、翌日からぞろぞろ

老人の方が来られては、カウンターの前に来て歌を歌うという、それは感動された老人が、自分の集落へお帰りになられて、こういったことで図書館に聞いたらわかったんだよと、みんなの前で歌ったらしいのです。そしたら、みんなもそういったことがあって、ああ、こういう歌知りたい、この歌詞は何なのだろうかとか、皆さんお持ちになって、それでそこからぞろぞろ来られて、カウンターの前に人だかりができるようなことになったという話を聞いたんです。そういうふうに何かきっかけがあると思うのですけど、いずれにしろ図書館のカウンターは貸し出しだけではなくて、住民の方々とのコミュニケーションがあって、住民の方々がちょっと知りたいということをどんどん図書館に聞いてみようとなり、図書館から例えばほかにご案内して差し上げて、もっと詳しいことがわかるということもあるし、特に地区館のこれからを考える、地区館というか、それぞれ地域の、中央図書館と一体となったようなそういったことができる仕組みづくりが必要となると思います。

図書館司書の資格も何も持ってないから、そんなこと聞かれても困るといったことをよく聞くんですけども、そうではなくて普通の方で、そういった方々がある程度答えられるようなツールを整える、この範囲だったらこう答えられますよということを整備していただきたい。それで、何かあったら図書館あるいは図書館の分館に聞こうという雰囲気をつくる。そうすると小学生も入ってくるし、それから中学生、高校生も入って、それはまたそこで学校との連携とかができてくるかもしれません。

ある図書館で聞いたら、学校の先生が出した宿題が、学校が土日休みになっちゃって、全員図書館に来た。図書館ではぞろぞろ来て、どんどん図書館のカウンターに聞くと、同じ質問ばかりで、貸してしまうともう本がなくなってしまうので大変困ったという話を聞いたんですけど、それは図書館が土日やっているといういいところですよね。それは学校とうまく連携をとって、上手に答えていただく。子どもたちも学校と図書館と両方使ってみようということになるんですね。

それで、図書館を使う子どもたちというのは、アメリカの調査でもよく本を読んでいるという結果もあるのです。いろんなことを図書館に聞いてみると、いろんなことを教えていただける、学校だけではなくて。学校の先生は何しろ60人とか40人とか30人、20人とか、たくさん子どもさんを抱えていらっしゃいますので、図書館に行くということで個別に教えてもらえる。

だから、あるドイツの図書館では、子どもたちは一度うちに荷物を置いてから、図書館に来て、図書館にいろいろ聞いて、自分たちの宿題をやったりいろいろしているというのを、

写真入りで見たことがありますけども、図書館のそういう機能をもっと人的な面でも高めていただいて、そこで働かれる方もそういったことができるとおもしろいと思うのです。仕事が楽しくなってくる。そういうことで図書館のカウンターで働きたいという人がたくさん出てくる、順番待ちで試験をやる。本を開架する試験があったりとか、それでセレクトするというところも出てきていますので、そういった意味で、人の面というのを考えて、特に会長が言われたような小さな図書館でも同じようなサービスが受けられるふうに松戸の図書館を変えていったらいいのではないかと僕は思います。

柳澤委員　アメリカのシアトルの中央図書館はボランティアの方たちが400名くらい常にいて、その方たちが積極的に館の運営に当たっているんですよね。日本でボランティアというと、今は被災支援ばかりみたいな感じになってしまって、本来の意味のボランティアはそういうパブリックな場所で支援をしていくというところから始まっているので、日本はボランティアが育ちにくいですよね。人助けすればボランティアだというコンセンサスがある。

僕は今、大串副会長が言われたように、人を育てるにも、分館とかこれだけ広く面的に広がっているのだから、そういうボランティアの人たちにある程度サポートしていただくという仕組みも、ここから同時に必要なのかなと思うのです。中央館だけにターゲットを絞るのではなくて、どうやってこの19分館を活用していくのか。我々も見せていただきましたけど、僕たちが感じた印象は、どこへ行っても同じ。図書館は、公平性みたいなものが必要だから、どこに行っても同じような分量で置くという、これが逆にすごく違和感があって、何でこんな19地域あるのに全部同じ量で、ただその積み方も全部違う。量は同じだけど、低い書架のところもあれば、高いところもある。

ただ、一律して言えたのは、全くオープンスペースがなくて、そこで本を読もうという気にさせる分館はほとんどない。それこそ貸して、借りるという、その家具もパイプ椅子で、テーブルも奥行き45cmしかないみたいな、これではなかなかくつろげない。

そういう設えも含めて、もう少し分館の役割も明確化するのと、あとはやはり人を育てるのに、今から始める。図書館に対して意見がある方々がいっぱいいるし、質の高い意見を今まで沢山いただいているし、そういう人たちに一緒になって考えてもらうみたいに、そのめり張りをどうやってつけていくかということも、この審議会で話す大事な内容なのかなと思います。

大串副会長　もう一つだけ言いますと、例えば宮崎市はボランティアの部屋が図書館の中央館にあるんです。そこで講師の方が常駐されていて、例えばボランティアの方が７時間ボラン

ティアしたら、１時間は勉強していただく。その講師の方々は、７時間ボランティア活動されたら１時間は勉強する、その勉強の先生方なのです。僕が見にいった時は７人ぐらいいましたね。それで、カリキュラムというのがちゃんとあって、今、児童室でボランティアされているのだったらこういうカリキュラムで勉強しましょうねという形で、それでまたその先生が、今度あなたはここですねという感じで、それで１時間レクチャーをする。そういったことで育って、僕が行ったときはボランティアが350人ぐらいいらっしゃったんですけども、そういうことは必要だと思うんですよ。

そういうことのために、そういう先生方をそろえるためにある程度行政も配慮して、お金を出して、それでそういった方々が活動できるような、そういったこともしてボランティアの方々もレベルアップしているのですね。そういった方々が図書館に対する理解も深めて、それからサービスの中身の理解を深めて、調べものも深めていただく、そういったことも僕はこの中央館整備に係る機能の中に一つぐらい入れておいたほうがいいと思います。

それで、皆さんが図書館というものを通じて図書館のサービスを受け取ったり、そういうボランティアを通じて図書館に対する理解を高めていただいて、皆さんが図書館の応援団になっていただいて、よりよい図書館にするために市民の皆さんも一緒に、職員と一緒に考えながら、そういう気風をつくっていただきたいと思うのです。

会長　前回、松戸と同規模の自治体の図書館の状況を柳澤委員にご説明いただいたときに、規模の大きい中央館があるのに、市民１人当たりの貸出実績が低いところがありましたよね。あれは前回もそうではないだろうかという議論がここであったんですけど、要するに分館、地区館がないのです。大きい中央館はあるんだけど、地区館も分館もないのです。そういうところは、やはりまち全体の利用率というのは下がってしまうのです。身近に図書館がないと、どんなにすばらしい大きな中央図書館があっても、市民全体の図書館利用率というのは余り上らない。そういう意味でいうと、松戸は非常に有利な状況がある。だから、分館に来た人に本を貸しているだけではもったいなく、今、委員の方々が議論していただいたように、分館も拠点にして、中央図書館の機能を市民に提供していくという、中央館がこういうことをやっていますということをちゃんと分館にも伝えるべきだと思いますし、そういう視点で中央図書館の機能を考えると、分館と中央館の間の物流や情報流通をスムーズに行うような建物が必要になると思います。

前にもシアトルの写真を見ていただいたかもしれないですけど、大きいトラックが何台も並んでいるようなところがありました。今の松戸の分館というのは、分館の予算で買った本

がずっとそこにあるという状態です。２万冊ぐらいしかない本だとすぐに飽きてしまうわけで、資料の入れかえを本当は頻繁にするといいわけです。その場合、かなりの本が動くわけです。そういう物流をきちんと中央館がコントロールして、大きいトラックを横づけして、簡単に本の入れかえ、分館から来た本を簡単に中央館に引き込んで、中央館で新しく準備した本を簡単にトラックに乗せて、どこかにぱっと回せるとか、あるいは分館でレファレンスをしたときに、その母体になる本が例えば午前中にレファレンスすれば、午後には届くみたいな、松戸だったら十分そういうことが可能なわけです。建物としてそういう物流を非常にスムーズに職員の負担にもならないようにできるような設えというようなものが中央館に必要ではないかと思います。コンベヤーか何かができていて、全部ぽんと乗せるともうトラックの出口のところにその本が準備されていてみたり、小規模な場合はバイク便みたいなものを走らせてもいいのではないかと思いますけど、そういうものに対応するような中央館の建物がいいのではないかと思います。

鈴木委員　今、本当に中央館の機能の関係、それからあと分館との関係、それからまたあと大串先生のほうから人の機能のお話もしていただきまして、非常に松戸市で足りない部分とか、そういったお話を委員の皆様からお伺いすることができて、これをどうやって現実に生かしていくのかということも含めていろんなご指導をいただいて、大変私も勉強になりました。

人のつながりはやはり非常に大事なのだということを改めて感じ、図書館に足を運ぶ方は皆さん、人でございますので、皆様をお迎えするような、きちんとしたおもてなしのできる人の機能も大変重要なことになってくるのだろうということも改めて感じました。これからも委員の皆様ともう少しご議論をさせていただきながら、ぜひいい中央館それから分館との機能の充実という面も図らせていただきたいなと改めて思った次第でございますので、よろしくお願いしたいと思います。

会長　今日、お手元にあるこの資料で、左側に機能がずっと並んでいまして、右側に矢印で具体的な説明があるんですけども、最初にお話ししましたように、空間の表現については従来型の図書館のイメージとなっています。この従来型の図書館の構造の上にプラスして、これから必要とされる、例えば情報提供や支援機構など、いろいろな中身についての機能、働きについての議論をしていただいたと思います。また、人的な機能について加えるべきだというご意見をいただきました。

そこで、議論いただいた従来型の施設にプラスして、新しいイメージとしての空間、施設としてゾーニングいたしたいと思っております。そんな形でこれをまとめて、先ほどの成果

物という形でまとめていくという形でよろしゅうございますか。

まさに、従来ないような構造物というのをつくっていかなければなりませんので、とにかく名前がつかないこの空間というのを、松戸モデルみたいな、従来型の言葉では何とも表現できないのだけども、全部が多目的室なのみたいなことになってしまうのかもしれませんけども、大胆に構想を進めていきたいとい思います。

それで、今回の議論だけではとても足りないと思いますので、思いついたことにつきましてはどんどん事務局にご連絡をいただいて、この審議会の時間の中だけではなくて、皆さんの発想、ひらめきを成果物に反映していきたいと思いますので、今お話ししたような方針のもとに、さらに膨らませていきたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

柳澤委員　少しばかげて聞こえるかもしれないのですが、今は2015年ですけど、人口問題というのは、公共建築を考える上ですごく大事で、2035年、2055年に松戸の人口が大体どのぐらいあるかも予測できますよね。そのときに我々は次世代にこの建物を受け継がなくてはいけない。我々はもうあと30年は生きているかどうかもわからないので、その30年後を受け継がなくてはいけない人たちに、負の遺産にしてはいけないわけです。今これがいいと思っていても、30年後に本当にそのままいいかどうかという、公共建築をこれから考えるときには、公共建築をつくらないと言ってしまわれるぐらいで、むしろ縮小していく方向なので、当然これあればいいよねという内容と同時に、本当にこういうものは次世代に受け継げるよねというようなプログラムがちゃんとあるべきだと思っています。これは従来だからそのまま受け継げるけれども、松戸市として、これを30年後の彼らに託そうと思うか。

今おっしゃったように、リフレッシュ機能で、例えばロンドンのアイデア・ストアというのはいろんなプログラムとか部屋があって、音楽練習室もあれば、ダンス教室もあれば、本当にそれこそ市民がリフレッシュするための部屋を用意してあげている。まさにリフレッシュ機能というのは、例えばスポーツのジムが入ってくるということだって、単純な商業的なジムのイメージしてしまうと余りよくないけれども、何か子どもたちがそこで雨の日は小さなお子さんもそこで遊べるようなジムが図書館の周りにあって、子どもの健康を考えるのはその周りで本を読むとか、そういうことがあってもおかしくないです。今、一番小さい子どもたちがいるお母さんたちが、雨の日、遊ばせる場所がなくてお金を払ってショッピングモールへ行って、そして適当に遊んでいる、全然健康的じゃないし、全然向学的じゃないですよね。

何かそういう、30年後に託せるようなことを考えるのも、我々がリフレッシュしても余り

しようがないよなという感じもあるのですけど、リフレッシュというのは次の世代がリフレッシュできるという意味で機能を考えていくのもあるかなと思います。

森委員　私も今回、地域の位置ですかね、地域は他機関連携機能とリフレッシュ機能に関しては、今後の松戸市のまちづくりとも絡むことなのかなと思って捉えているんですけれども、例えば公民館の機能であるとか、あと今後の福祉施設等の役割であるとか、そういう意味もあるでしょう。スポーツ機能とおっしゃいましたけれども、いわゆる教育委員会の運動部門との兼ね合いであるとか、だから今後考えなければいけないのは、縦割りというのもありますけれども、役割のすみ分けと、それからどれだけいろんなものを共有できるかということも捉えながら考えていかなければいけないことだと思います。

できたら、このリフレッシュ機能というのはいろいろな選択肢がありますし、例えば若い人たちが集まり、その中でスポーツ機能があれば、もしかするとシャワーということも考えられるかもしれないし、いろいろな選択肢が出てくるのではないかと思って、これはもう少し機能の中の課題として考えていければと思います。

会長　大きな図書館だとホームレスの方が来てしまって、臭いの問題も出たりするのですけど、本当はシャワーが１つあれば解決してしまう。どこまでやるのかという問題であります。

ヨーロッパの100年、200年存続する図書館は、それはそれで非常にすばらしいのですが、僕は建物の中についてはスクラップ・アンド・ビルドできるような、何か簡単に壊して入れかえができるようなものだけれども、ちょっとしゃれているみたいな、そういうような考え方もあっていいのではないかと思います。通り一遍ではない検討をする必要もあるのではないかと思うんですよね。

森委員　多様性は持たせれば持たせるほど、根本だけはしっかりと持っていなければいけないのですが、私はやっぱり一番忘れてならないのは、常世田先生が最初のほうに、きちんとした機能を持っていれば、それがいろいろなものに展開していける、例えば図書館としての機能がしっかりしていけば、子どもに対しても、児童に対してもいろいろな方たちに同じものを、いろいろなものをフレキシブルに提供できるというような言葉があったのですけれども、フレキシブルに対応できるためにも、ここだけ本当に押さえながらやりたいなと思っております。

柳澤委員　今、公共も民間もそうですけども、病院はすごく増築が多いです。なので、病院の建築においては敷地が豊かならば、その隣に建てればいいのですけど、病院の機能をそのまま上に持ち上げるとか、そういうことが結構病院としてはあるので、病院自体の中で増床、

要するに床を増やせるような仕組みを最初に置いておくということが主流になりつつあるのです。そういうことは、図書館はまだないのです。図書館は場所がないと本を捨てちゃうみたいな、そういうひどいことになっていて、建築的にはどう本をストックしていくのかとか、そういうことも将来的にプログラムとして加味させたほうがいいのではないかと思うのです。

逆に言うと、あの図書館はあんなに知識があるのだということがちゃんと視覚的にも伝わるということが大事で、大体今までの図書館というのは箱におさめて、もう必要なくなったら捨てる、もしくはどこかに貯蔵するということなので、そういう建築のあり方としての、将来に対してのスタンスというのもあるのかなと思います。実際不可能なことではないと思います。

会長　これから建設が始まる高知県立図書館と市立が合築となる図書館があります。図書館の真ん中にガラス張りの書庫をつくるんですけど、当然最初はがらがらです。それで、書庫も多層になっているので、最初はそこに人を入れてしまって、共有スペースとして使ってしまおうという検討もされています。本が増えてきたら、それを閉架にする。でも、それ全体がガラス張りなので、その閉架の中に入っている人も見えるし、本がたまってきたら、本のストックの真ん中が見えるという、そんなことを考えています。資料がたまっていく段階、あるいは利用者の多い、少ないの段階で、使い方を変えられていくような空間、なかなか言うは易しなんですけども、そういう考え方も導入できれば、まさに先ほどお話をした「成長していく図書館」というコンセプトを視覚的に実感できると思います。

そろそろ時間が来てしまいました。次回の審議会では、これまでのご意見をもとに素案をさらにまとめた提言書（案）として、少しまとめた形でご提示したいというふうに思っております。事務局と私で少し取りまとめをさせていただきたいと思っておりますが、そういう進め方でよろしゅうございますか。

もちろん、先ほどお話ししましたように、ご提案があれば事務局や直接私にご連絡いただいても構いませんので、なるべく皆さんの意見を盛り込んだ形で進めていきたいと思っていますので、よろしくお願いしたいと思います。

まだ、これは一言というのがありましたら、ありますか。

（「はい」の声あり）

◎その他

会長　それでは、最後に事務局からよろしくお願いします。

事務局　委員の皆様、本日は貴重なご意見を本当にありがとうございました。

次回の開催につきましては、来年の１月下旬あたりをと考えておりますので、本審議会終了後に、委員の皆様方の日程調整をさせていただきたいと存じます。よろしくお願いします。

以上でございます。

◎閉　会

会長　それでは、以上で本日の議題は終了いたしました。

お疲れさまでした。

閉会　午後　５時１０分

この会議録の記載が真正であることを認め署名する。

図書館整備計画審議会副会長

図書館整備計画審議会委員